〈講演会〉

愛知大学が所蔵する孫文関係史資料について

東亜同文書院大学記念センター　ポストドクター　武井義和

【司会】 それでは最後になりますけれども、武井義和さんに「孫文と東亜同文書院・愛知大学」と題して講演をお願いいたします。武井さんの簡単な紹介をさせていただきます。武井さんは愛知大学の大学院中国研究科博士後期課程を修了されまして、2006年に博士（中国研究）の学位を取得されています。現在東亜同文書院大学記念センターのポストドクターです。博士の学位を取ったあとの若手研究者として頑張っていただいています。また、愛知大学の非常勤講師なども務められています。主な研究分野は近代日中関係史と朝鮮近代史ですが、特に本日の講演の内容と関係する論文として「東亜同文書院に関する先行研究の回顧と今後の展望」および「中国における東亜同文書院研究」というのがございます。それでは武井さんよろしくお願いします。

【武井】 ただいまご紹介に預かりました武井でございます。よろしくお願いいたします。

本日の私のテーマは、サブタイトルにあるように愛知大学が所蔵する資料の紹介でして、未公開のものも含めてパワーポイントでお見せしていきます。しかしその前にメインタイトルである「孫文と東亜同文書院、愛知大学」、この３者の相互関係について最初にお話せねばなりません。

一見すると時代を異にするこれらが互いにどのように結び付くのか、疑問を持たれた方も多いと思います。これについて、プリントの１．に記しましたが、「孫文と東亜同文書院」、「東亜同文書院と愛知大学」、「孫文と愛知大学」と設定しました。順番に見ていきます。

まず「東亜同文書院と愛知大学」ですが、これは同文書院の教員であった山田良政・純三郎兄弟と孫文との関わりを示しています。山田兄弟は明治の初めに津軽藩藩士の子供として、現在の青森県弘前市に誕生しました。兄良政は1900年南京同文書院教授に就任します。南京同文書院というのは、東亜同文書院の前身です。最初は1900年に南京に学校が創られるのですが、程なく発生した義和団事件のため上海に移転、1901年に上海で東亜同文書院として再出発したのです。良政は教授を辞職して孫文が起こした清朝打倒の戦いに身を投じ戦死します。一方、その弟の純三郎は、やはり1900年に南京同文書院に学生として入学するのですが、兄の影響を受けて革命に現を抜かすようになり、学業がおろそかになったため退学処分を命ぜられます。しかし院長であった根津一による「兄が革命に命をささげたのに弟を退学にするのは可哀想だ」という計らいで、東亜同文書院で事務員兼助教授という身分を得ました。やがて日露戦争に出征し、1907年復職して教授になりますが、同年満鉄に就職します。程なく孫文の協力者として、秘書の役割を担うようになり、1925年に孫文が亡くなるまで革命活動を支えました。

実は、サブタイトルに記した「孫文関係史資料」というのは、こうした山田兄弟にまつわる資料を指します。したがいまして、主として山田兄弟の生涯をパワーポイントで映し出す資料とともにご

紹介し、その中で孫文との関わりについても取り上げるという形になります。

したがって、孫文と東亜同文書院自体は直接的な関係はありませんでしたが、兄弟がともに同文書院教員の職を辞して、孫文の革命活動を支援すべく関わっていったという点で、第一の関係性を設定しました。

次の「東亜同文書院と愛知大学」ですが、愛知大学は東亜同文書院大学最後の学長・本間喜一が中心となって、1946年11月愛知県豊橋市に設立された大学です。豊橋市は静岡県との県境の町です。現在は名古屋とその近郊にもキャンパスがありますが、この豊橋キャンパスが愛大発祥の地であり、現在も本部校です。われわれが所属する東亜同文書院大学記念センターもこの豊橋キャンパスにあります。そして愛知大学には40数年分・5,000名ほどの東亜同文書院時代の学籍簿・成績簿が保管されています。われわれは、それら学籍簿・成績簿を愛知大学が東亜同文書院の流れを汲むことを示す物的証拠として認識していますが、かつて山田兄弟が属していた東亜同文書院は、今お話した形で愛知大学に結び付くわけです。

3番目の「孫文と愛知大学」。孫文は1925年に亡くなりました。一方、愛知大学は1946年に誕生しましたので、直接的には接点がありません。ここで言いたいことは、山田兄弟にまつわる資料のことです。1991年秋、山田純三郎四男の山田順造氏が、それまで所蔵しておられた全ての資料を、愛知大学へ一括寄贈して下さいました。その中には孫文に関わる資料も含まれていますので、その意味で「孫文と愛知大学」という関係性を設定してみました。

冒頭でお話した様に、一見するとこれらの語句の相互の関係は見えにくいのですが、実は以上お話したような形で結び付いてくる、ということを述べさせて頂きました。

続いてプリントの2番に進みます。先に述べた、1991年に山田順造氏が愛知大学へ寄贈された資料を、東亜同文書院大学記念センターでは「山田家資料」と呼んでおります。この「山田家資料」は大別すると、A. 書画類、B. 書簡類、C. 写真類、D. 図書類、E. 資料ファイル類、F. テープ類、の6種類に分かれます。このうち山田兄弟が生きていた時代の、あるいは兄弟に直接関わる資料、例えば兄弟直筆の書簡とか兄弟が写っている写真などといったものはA、B、Cに該当します。これらは言わば歴史資料と位置付けられるものです。この中に山田兄弟、といっても良政は30代で早世してしまうので、純三郎に関する資料が圧倒的に多いわけですが、純三郎と孫文との関わりを示す資料や、孫文と他の革命家との間で交わされた書簡なども多数、山田家資料には含まれています。これは純三郎が孫文の秘書役を長年務めていたために手元に残っていたもののようです。ほかに、戦後台湾との間で交わされた書簡や、純三郎が台湾を訪問した時の写真なども多く含まれています。

一方、D. 図書類、E. 資料ファイル類、F. テープ類は純三郎四男の順造氏が山田兄弟について研究・調査した厖大な資料です。D. 図書類は順造氏が歴史の勉強のために読まれたと思われる歴史に関する書籍が多く、E. 資料ファイル類は図書や論文、資料のコピーをファイルしたもの、またはそれらをルーズリーフやノートに書き写したものです。非常に膨大な量に上っており、順造氏が熱心に研究・調査されていた様子が伝わってきます。一方、F. テープ類は聞き取りをした録音テープが該当します。

こうしたさまざまな形状の資料を愛知大学は所蔵しておりますが、そのうち山田兄弟に関する歴史資料のごく一部を、愛知大学に設置されている常設展示室で一般公開しています。今回はそのさらに一部分を神戸で展示させていただいているということでございます。

さて、私が勤務する東亜同文書院大学記念センターが入っている建物は、愛知大学記念館と申します。木造建築ですが、もともとは1908年に

陸軍第十五師団司令部として建てられました。第十五師団は大正時代に廃止されますが、この建物を含む敷地はその後も陸軍の管理下にあり、第二次大戦中は陸軍予備士官学校本部として使用されていました。敗戦直後、それまで軍の施設であったこの場所に、本間喜一が中心となって1946年愛知大学を設立したわけです。本日お見えになっている同窓生の方々はすでにご存知のことですが、この建物は愛知大学が誕生してから半世紀もの間、愛知大学本館として使用され、学長室をはじめ学生課や就職課などが入っていました。今から11年前の1998年5月、愛知大学記念館という名で学内展示施設として生まれ変わり、常設展示室が設置されました。以後、山田兄弟や東亜同文書院に関する資料を学内外の方々に広く公開している場所になっております。なお、愛知大学記念館は1998年に文化庁によって有形文化財に登録されております。

中には東亜同文書院を紹介する第一展示室と、山田兄弟の生涯、特に純三郎の生涯について写真、書簡類、文書類などを展示して紹介する第二展示室、第三展示室があります。

さて現在、愛知大学が孫文に関する資料を含む「山田家資料」を所蔵している理由は、すでにお話したとおり、山田順造氏が寄贈して下さったからなのですが、そのいきさつについても触れておきたいと思います。順造氏は東京に長年お住まいでしたが、お宅を訪問された方の表現を借りますと、「脚の踏み場もないほど資料がある。それは資料が多いというものではなく、資料に埋もれて順造氏は生活をしている」という状態だったそうです。

順造氏は自分の父や伯父にあたる良政・純三郎兄弟を顕彰すべく、それらの資料を展示するための資料館を個人で設立する構想をお持ちでした。したがいまして、資料館建設の候補となる土地を選定し、購入すべく努力されたそうです。しかし、結局は資金面で困難であることが分かり、またご自身が病気になられたこともありまして、最終的には断念されました。そして亡くなる直前に愛知大学への寄贈を表明されたわけです。順造氏が寄贈を表明された背景には、かつてご自身が学ばれていた東亜同文書院大学同期生の阿部弘さんという方をはじめとする、多くの方々のご尽力があったと聞いております。このあたりについては、毎年東亜同文書院大学記念センターが発行しております『同文書院記念報』という雑誌の第3号に、より詳しく記されていますので、関心のある方は是非ご覧いただきたいと思います。

では、いよいよ「山田家資料」をご覧に入れながら、山田兄弟の生涯についてお話して参りたいと思います。略年表形式でプリントにまとめておきました。ただ、時間の関係がありますので、細かな説明は省かせていただきます。

まずは山田良政からみていきます。良政は青森師範学校に進学しますが、「賄い征伐」の首謀者の身代わりになって退学となります。「賄い征伐」とは賄い費経費節約により寮の食事が粗末になったことに対する、学生たちの実力行使の事を指します。進路に困った彼は、弘前の実家の向かいに住んでいた陸羯南を頼って上京します。陸は『日本』という新聞を発行し、藩閥政治を攻撃した言論人として有名ですが、良政に「これからは清国の時代だ。清国の研究をせよ、ただ清国に渡っても何もならないから、技術を身に付けていけ」と諭し、それを聞いた良政は1889年水産伝習所に1期生として入学します。現在の東京海洋大学ですが、翌1890年卒業し北海道昆布会社に入社、程なく上海支店に転勤となります。日清戦争が勃発すると会社を辞職、陸軍通訳官として出征します。戦争後台湾に派遣されるのですが、その後北京に行きます。その頃、康有為、梁啓超らの清朝内部の改革派が立憲君主制を目指して、光緒帝の下で改革を推進しようとしていましたが、西太后ら保守派のクーデターにより失敗に終わりました。それが「戊戌の政変」と呼ばれる出来事です。この

とき、改革派の１人であった王照という人物の救出に加担します。すなわち北京公使館付武官の滝川具和（ともかず）らとともに天津まで護送し、日本の軍艦に収容します。

良政が孫文と出会うのはこの後です。1899年、両者は東京の山田良政の仮寓で初めて会い、これを機に良政は孫文の支援者となっていきます。翌1900年、南京同文書院の教授として南京に赴任しますが、短期間で辞職し、同年孫文が広東省の恵州で起こした清朝打倒のための戦い、いわゆる「恵州起義」に参戦します。しかしこの戦いは失敗に終わり、良政は捉えられ処刑されてしまいます。享年33歳でした。

やがて1912年に辛亥革命という形で清朝打倒を実現した孫文は、翌1913年２～３月に日本を公式訪問しました。記念センターには孫文が認めた良政追悼文がありますが、訪日中に孫文は東京谷中の全生庵に山田良政碑を建立しました。記念センターで展示している追悼文と建立された碑に篆刻されている文面は殆ど同じですが、前者が「山田良政先生墓碑」と記されているのに対し、後者は犬養毅揮毫による「山田良政君碑」と篆刻されているといった違いがあります。しかし、いずれにしても孫文が追慕の念を抱いていた様子が窺えます。

ただ、この段階では良政は行方不明として認識されていました。戦死したかどこかで存命なのか分からなかったからです。最終的に戦死が確認されたのは1918年、死後18年経過してからでした。純三郎は良政が死んだとされる場所の土を持ち帰り、故郷の弘前市で葬儀が営まれました。翌1919年には菩提寺の貞昌寺に記念碑が建てられました。この時も孫文は碑文を認めています。

すでにお分かりのように、孫文と知り合った期間は大変短いものでした。1899年に出会い、翌年には亡くなっています。しかし、短期間の接触に拘わらず、孫文は追慕の念を忘れませんでした。それはやはり文字通り、良政が命を犠牲にして孫文に協力したことによるといえます。この良政への想いは革命家たちの間ではすぐに消え去ることはありませんでした。これは何応欽（かおうきん）という人物です。彼は中華民国の軍人で陸軍大将まで上り詰めた人物で、1945年９月に南京で行なわれた日本軍の降伏文書調印式における中国側代表を務めたことでも知られています。その後、1949年に台湾に渡り国民政府の要職につきますが、1955年弘前市にやってきて、良政の墓参をしています。その時の写真です。

山田良政碑（青森県弘前市貞昌寺）

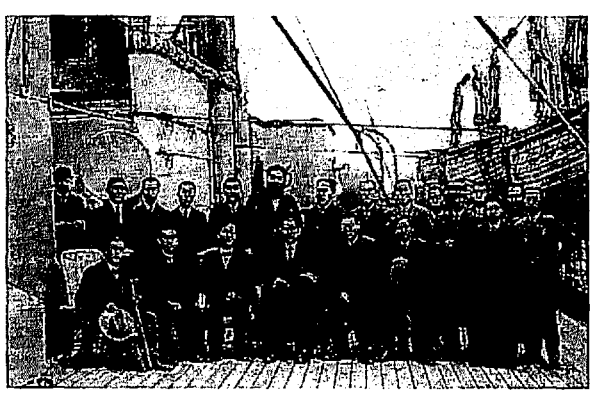
何応欽（前列右）の山田良政墓参

次に純三郎についてみていきます。純三郎が孫文と面識を得るのは1900年、上海で良政に紹介された時です。その後は最初にお話した通り、南京同文書院を経て東亜同文書院に勤務し、日露戦争で出征した後、短期間の復職を経て満鉄に入社します。これがある意味、大げさに言えば純三郎の運命を変えます。彼は満鉄が採掘する石炭の販路拡大のために上海に派遣され、三井物産上海支店にデスクを置いて勤務します。そのときに目の当たりにした商売の実態に驚いたといいます。彼の甥で拓殖大学教授を務めた佐藤慎一郎氏が書き残した本によれば、三井は石炭の売買の際に、秤の上に足を置いて重さをごまかすといったような不正を行なっていたそうで、また三井が石炭を売る際に、例えば上は工場長から下は雑用係のような人にまで賄賂を贈らないと、質の良い石炭でも粗悪品だと騒ぎ出すという有様であったということです。「これは男のやることではない。少なくとも俺はやらないと心に決め、中国への革命に情熱を傾けるようになった」という純三郎の話が記載されています。

一方、アメリカにいた孫文は1911年、辛亥革命の報を聞いてヨーロッパで外交活動を行った後、帰国の途につき12月21日香港に到着します。純三郎は上海から香港まで出迎えに行っています。こちらは廖仲愷という革命家や、日本人の宮崎滔天なども孫文を出迎え、純三郎などとともに写っている集合写真です。その帰りの船の中で純三郎は三井物産から資金を調達することを依頼され、借款交渉を行ないます。三井物産は中国最大の鉄鋼・石炭企業である漢冶萍（かんやひょう）公司を日中合弁とする条件で、500万円貸すという話でまとまり、300万円が孫文側に渡されます。しかし、漢冶萍（かんやひょう）公司の日中合弁案は実現せず、借款交渉は挫折しました。この300万円は後に革命軍から返金されたといわれています。

1913年、孫文は日本を公式訪問します。その一行の中に山田純三郎、そして安井先生、横山先生のお話にも出てきた、日本語の通訳を務めた戴季陶の姿があります。彼は日本留学経験があり日本語が上手でした。1924年に孫文が神戸にやってきて大アジア主義演説を行った時にも通訳を務めています。1914年、旧満州に勢力を誇っていた張作霖を打倒する動きが現れたため、純三郎は孫文の命により革命連携のため戴季陶、陳其美とともに旧満州へ渡航します。こちらはその直前に、京都嵐山で息抜きをする山田たちです。目隠しをして

遊ぶ山田たち



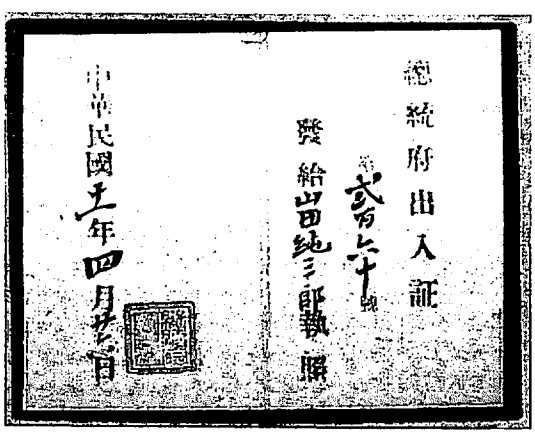
デンバー号船上での集合写真

大連満鉄病院にて

いるのが戴季陶、通せんぼをしているのが山田、その後ろが陳其美です。人間味あふれる珍しい写真です。こちらは満州渡航後、大連の満鉄病院を拠点として活動する3人を写したものです。しかし結局、この活動は実を結ばず帰国します。

この陳其美という革命家は、孫文の片腕として辛亥革命では上海で活躍したのですが、1916年5月、上海にあった山田の家で政敵の袁世凱が放った暗殺者により射殺されました。この事件は山田家に影を落とすことになります。というのも、陳の近くに純三郎の長女・民子を抱っこしていた女中がいたのですが、銃声に驚き長女を地面に落としてしまいました。そのため民子は脳に重い後遺症を持つことになってしまいました。ですが、民子は70台半ばで亡くなるまで家族の方々に大事にされたということです。

一方、孫文は軍閥による北京政府に対抗して中国南部の広東に1917年、1920年、1923年の3度にわたり広東軍政府を樹立し、その間、1914年に自ら結成した中華革命党を1919年に「中国国民党」へ改組するというような政治的な動きをみせています。山田は今お話した広東軍政府に関わるようになります。これは山田純三郎に発給された（第2次）広東軍政府—厳密に言えば「広東護法政府」といった方が正確かも知れません—総統府出入証です。また、広東軍政府時代に山田純三郎と孫文らとの間で電報の発信・受信する際に用いられた

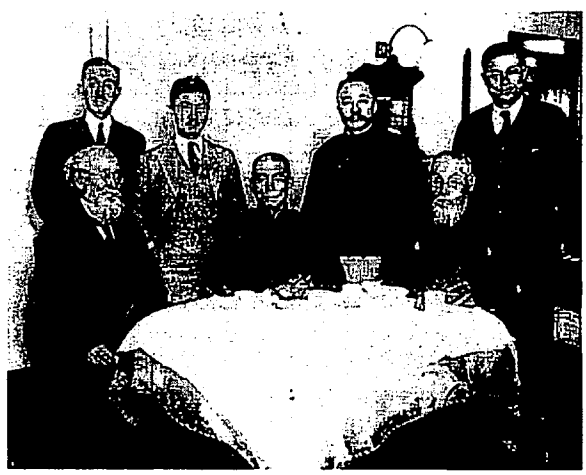


広東軍政府総統府出入証

暗号表も残っており、これは山田純三郎と孫文ら革命家との密接な関わりを示す資料といえます。今回は持ってきていませんが、実物は記念センター展示室のガラスケースの中に展示されています。

1922年6月、広東軍閥の陳炯明（ちんけいめい）がクーデターを起こして（第2次）広東軍政府を崩壊させた時、純三郎は広東日本総領事の藤田栄助と連絡を取って、孫文を上海まで避難させています。孫文は翌1923年に陳炯明を追い払って再び広東入りし、第3次広東軍政府を樹立しました。

1924年、孫文は段祺瑞（だんきずい）や張作霖らと北京で会見するために広東を出発します。安井先生のお話と重なりますが、途中神戸に立ち寄って有名なアジア主義演説を行なうわけです。これはその時滞在した神戸オリエンタルホテルで撮影された写真です。前列中央が孫文、その隣が頭山満です。後列左端が純三郎、その隣は大アジア主義講演で通訳を務めた戴季陶。さらにその隣には横山先生のお話にも出てきた李烈鈞がいます。

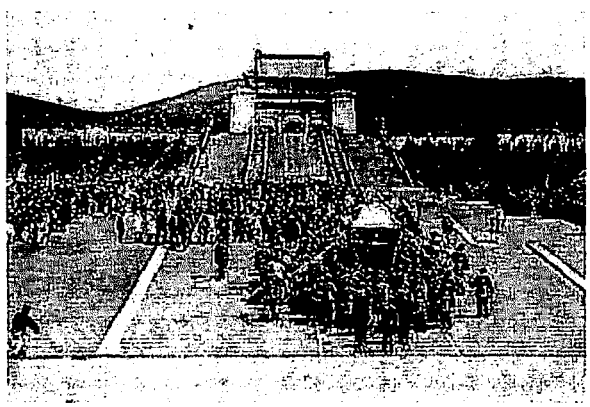


神戸オリエンタルホテルでの孫文ら

孫文は北嶺丸という船に乗り神戸を離れ、12月1日天津港に上陸します。しかしこの頃、彼は末期の肝臓がんに罹っており、1925年3月、北京で亡くなりました。亡き骸は北京近郊の碧雲寺に埋葬されました。

さて、孫文が亡くなった後、新たに誕生した広

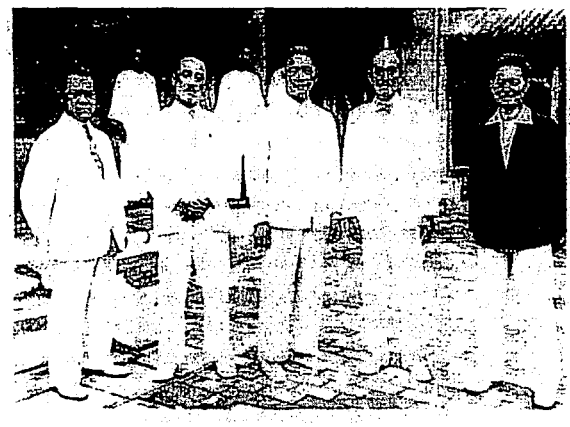
東国民政府で純三郎は顧問に就任し、国民政府出入証が発給されています。1925年9月29日と日付が入っており、孫文の遺言が記されているものです。しかし、孫文の死後、中国国民党内部では右派と左派の対立が激化し、そうした中で純三郎の古い同志の1人で、この時左派であった廖仲愷（りょうちゅうがい）が暗殺されます。こうした国民党の分裂的状況を目の当たりにして、純三郎は距離を置くかのように、1926年には広東を離れ上海に戻っています。1928年、蔣介石が各地の軍閥を倒して中国を統一し、南京国民政府を樹立しますが、その翌年、南京に中山陵という孫文の墓が造られ、6月2日、北京から孫文の棺が移され慰霊祭が執り行われました。この写真は中山陵の石段を登る孫文の棺です。移霊祭に参列する純三郎の姿を捉えた写真も記念センターで所蔵しています。



孫文移霊祭

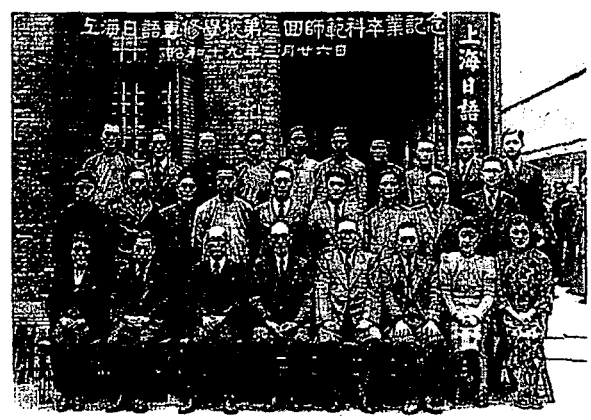
しかし1930年、独裁色を強める蔣介石に対して汪兆銘—汪精衛ということが多いですが—らが北京で拡大会議を開催すると、純三郎もこれに参加します。その際に孫文が亡くなった家を訪れています。この中央の人物が汪兆銘（汪精衛）、日中戦争中に日本が樹立した傀儡政権「南京国民政府」の首席となる人物として有名ですが、その右隣りが純三郎です。

この流れを受けて翌1931年、汪兆銘や孫文長男・孫科らが南京国民政府に対抗して広東に広東国民政府を樹立すると、純三郎は外交部顧問として



孫文逝去の家にて

招聘されます。しかし同年勃発した満州事変のため、1932年に広東国民政府は南京国民政府に合流します。その後、純三郎は目立った動きをせず、上海に日本語専門学校（上海日語専修学校）を設立し、教育事業を行なっています。これは1944（昭和19）年3月の卒業式の写真です。最前列のほぼ中央、左から4人目に校長としての純三郎がいます。



上海日語専修学校卒業式写真

やがて日中戦争を経て、1945年に日本は敗戦を迎えます。敗戦当時上海には10万人ほどの日本人居留民がいましたが、中国奥地の重慶から進駐してきた国民党軍によって設定された集中営—収容所と言った方が分かりやすいかも知れませんが—、そこへ強制的に移住させられ、行動の自由も制約されていました。そうした状況下にあって、純三郎に対する中国側の評価は高いものがありま

した。次の写真は日本人管理所の所長である王光漢という軍人が純三郎に贈ったものですが、この写真を贈った4日後に純三郎に対して許可証を発

王光漢写真

給しています。そこには「山田純三郎はかつて孫文の革命活動に協力したことにより通行の自由を認め、日本人管理の適用外とする」というような文言が記されています。また、同じく国民党軍が1946年5月に発行した雑誌『導報画刊』には純三郎を紹介する記事が掲載されており、「中国革命の友」というサブタイトルが付けられています。反日感情が強かった当時にあって、これらの資料は中国側の純三郎に対する評価が高かったことの証ではないかと思います。

純三郎は1948年12月に日本に引き揚げましたが、孫文追慕の念は消えることはありませんでした。孫文の命日に当たる1955年3月12日、純三郎が主催者となって東京の湯島聖堂で「孫文先生逝世三十周年記念祭」を開催しました。この時は300人ほどの参列者がありまして、横浜華僑なども参列しております。挨拶を交わす純三郎の姿が撮影された写真もあります。それから5年後の1960年に純三郎は東京で亡くなりましたが、1976年故郷の弘前市貞昌寺に、青森県日華親善協会などが中心となって純三郎記念碑が建てられました。その上部には「永懐風義」という題字が篆刻されていますが、それは「立派な行いを永く思う」という意味で、蔣介石が贈ったものです。本文は山田兄弟の、特に純三郎の中国革命における功績が大きかったという内容となっています。現在、この碑はまるで兄弟が寄り添うかのように、大正時代に建てられた山田良政の碑と並んで立っています。

以上、山田純三郎の生涯を孫文との関わりを含めつつご紹介しましたが、彼の生涯を通じてみた場合、孫文と行動をともにした時代が大きく活躍した頃であった様子が浮かび上がります。その意味で、1925年という年は、厳密にいえば孫文の死は、純三郎の中国革命における関わりの点でも、また純三郎個人の人生においても節目の年であったと位置付けることができます。

最後になりますが、本日は資料紹介という形で山田良政、純三郎兄弟についてご紹介するとともに、これらの資料が愛知大学に寄贈された経緯も含めてお話させていただきました。今回初めて彼らの存在を知ったという方も多いかと思います。孫文の革命に協力した日本人として、宮崎滔天や萱野長知などを挙げることができますが、彼らに比べ山田兄弟は研究の対象にはなってきませんでした。その理由として、日記や自伝を残さなかったことが挙げられます。しかし我々としましては、山田兄弟について今後研究を深めていくことを考えておりますので、またこのような場で発表させていただけたら幸いでございます。また、宣伝になってしまうのですが、愛知大学の常設展示室にはまだ多くの資料がございますし、展示室が入っている愛知大学記念館自体も歴史的に価値のある建物ですので、皆様機会がございましたら是非お越しください。

以上で、私の発表を終了させていただきます。長らくのご静聴ありがとうございました。

2009年11月3日

神戸資料展示会・講演会

「孫文と東亜同文書院・愛知大学
—愛知大学が所蔵する孫文関係史資料について」

愛知大学東亜同文書院大学記念センター P.D
武井義和

1．はじめに　—孫文、東亜同文書院、愛知大学の相互関係—

①孫文と東亜同文書院

⇒書院の関係者、後に孫文の支援者となる山田良政・純三郎兄弟。

・山田良政：1868～1900年。南京同文書院教授（1900年）。

・山田純三郎：1876～1960年。南京同文書院学生（1900年）、
東亜同文書院事務員・教員（1901～1904年、1907年）。

②東亜同文書院と愛知大学

⇒東亜同文書院大学最後の学長・本間喜一が愛知県豊橋市に愛知大学設立（1946年）。

③孫文と愛知大学

⇒1991年秋、故山田順造氏（純三郎四男・1941年東亜同文書院大学卒業）より孫文関係史資料などが愛知大学へ寄贈。

2．「山田家資料」について

①種類

A）書画類、B）書簡類、C）写真類、D）図書類、E）資料ファイル類、F）テープ類。

②「山田家資料」が愛知大学に寄贈された経緯（1．③参照）

3．史資料から見る山田良政・純三郎兄弟と孫文との関係

①山田良政と孫文

山田良政：陸羯南（くがかつなん）に諭され、清国へ目が向く。

1898年　「戊戌の政変」で王照の日本亡命に関与。

1899年　孫文と出会う。変法派から革命派への支援。

1900年　孫文による「恵州起義」に参戦し戦死。

1913年2月　東京谷中の全生庵に山田良政碑建立。

1913年2～3月　孫文、日本を公式訪問。

1917年9月　第1次広東軍政府樹立、孫文大元帥（~18年7月）。

1919年　孫文、在上海。

1919年10月　青森県弘前市貞昌寺に山田良政碑建立。

②山田純三郎と孫文

山田純三郎：1900年、上海で良政から孫文を紹介される。

1911年12月　辛亥革命の成功を聞いて欧米から帰国した孫文を香港まで出迎え。三井物産との借款交渉に関与。

1914～15年　張作霖打倒の動きに呼応するため、孫文の命により満洲に渡る。

1916年５月　陳其美暗殺。

1922年６月　陳炯明のクーデターで広東護法政府（第二次広東軍政府）崩壊。純三郎、孫文を救出し上海まで同行。

1924年　孫文、広東から北京へ北上。途次神戸に立ち寄る。

1925年３月　孫文死去

1925年７月　国民政府顧問に就任。

1925年８月　廖仲愷暗殺。

1926年　広東を離れ、上海に居を構える。

1928年　北伐完了。蔣介石率いる南京国民政府成立。

1930年　北京で開催された拡大会議に参加。

1931年　広東国民政府に参加、外交部顧問を委嘱される。

1931年　満州事変。翌年広東国民政府は南京国民政府に合流。

1936年　上海日語専修学校を設立。

1945年　日本敗戦。

1945年８月～　日僑自治会委員、残留日僑互助会会長。

1948年12月　上海から引き揚げ。

1960年２月　東京都練馬区で死去。

４．おわりに

＜参考文献・資料＞

結束博治『醇なる日本人　孫文革命と山田良政・純三郎』（プレジデント社、1991年）

馬場毅「孫文と山田兄弟」（『紀要』126、2005年10月、愛知大学国際問題研究所）

保阪正康『孫文の辛亥革命を助けた日本人』（ちくま書房、2009年）　など

≪講師略歴≫

武井義和

1972年　埼玉県生まれ（６歳より現在まで愛知県在住）。

1995年　愛知大学文学部史学科卒業。

1997年　愛知大学大学院中国研究科博士前期課程修了。

2006年　愛知大学大学院中国研究科博士後期課程修了。

現職：東亜同文書院大学記念センターポストドクター、愛知大学非常勤講師など。

主な研究分野：近代日中関係史、朝鮮近代史。

主な論文：「上海における朝鮮人社会の歴史的考察（1910～1945）」（博士学位論文）、「戦前上海における朝鮮人の国籍問題」（『中国研究月報』60巻１号、2006年）、「東亜同文書院に関する先行研究の回顧と今後の展望」（『オープン・リサーチ・センター年報』2006年度版・創刊号）、「中国における東亜同文書院研究」（『愛知大学国際問題研究所紀要』132、2008年）。

【司会】 それでは何かご質問がございましたら。

【吉村】 私は書院の43期生、愛知大学3回生の吉村と言います。今山田純三郎先生のお話がありましたが、戦後昭和24年に先生にお会いした数少ない生存者だと思います。私が勤めておりました兼松に純三郎先生のご子息で後に役員にもなりました山田忠さんという方がおられます。この忠さんの話は全然出てこなかったので。もちろんもう亡くなっておられますけれども、良政さん以外に忠さんという方がおられたということをちょっと申し上げたいと思います。

【司会】 貴重な情報をありがとうございます。では武井さんどうもありがとうございました。だいぶお疲れかとは思いますが、4名の先生方にちょっと前に出ていただき、会場との質疑応答をさせていただきたいと思います。先ほどは大変時間がせっておりましてお1人しか質問をお受けできませんでしたので、それを埋め合わすという意味合いで若干時間を取らせていただきたいと思います。どの先生に対するご質問かを最初に明らかにしていただいて、その上でご質問をお願いします。

【質問者】 武井先生に。山田良政氏に関しまして、戦死という言葉がお話の中で出たと思うんです。完全に刑死です、この方は。なぜ刑死したのか。私が聞き及んでいるところでは、日本人であるということを名乗れば、国際問題があるからたぶん助かったのではないか。しかしあくまでも中国人として名乗られた。こういうことをやっぱり日中関係の問題としてもっともっと大きな声で言うべきだと思うんです。さっきも私言いましたけれども満州問題についても、やはり西洋の問題とつながってくると思います。そこに歴史を見ていかなければいけないと思うんです。日中問題も完全に満州の問題というのが1つの大きな存在だと思いますが、その辺についてどうお考えかお伺いしたいと思います。

【司会】 2点出ていますけれども、山田良政の死亡の問題と、日中関係の満州租借問題について。お答えを。

【武井】 はい。ご質問ありがとうございます。確かにおっしゃるように、もし彼が日本人であるということが分かっていれば処刑されなかったと思います。当時日本は清国にたいして治外法権を持っていましたから、処刑すれば国際問題になります。実はこの山田良政が亡くなる時の詳しい状況は分からない部分が多いんですね。ただ言われているのは、当時処刑した清朝側の兵士が、例えば山田は金縁の眼鏡をかけていたんですが、そうした格好とか服装から言ってもこれは中国人じゃない、日本人に違いないということで「お前は日本人か」と聞いたらしいんです。「日本人なら助けてやる」と言ったそうなんですが、良政が一言も発しなかったために仕方なく処刑したという話が伝わっています。ですので刑死の理由というのは、今申したように良政は日本人と言えば助かったんですが、そうしなかった背景には孫文の革命活動に命を捧げてもいいという思いがあったからかと思います。

【司会】 たぶん先ほど安井先生のお話に出てきた満州租借に関連している。安井先生にお答えいただけますか。

【安井】 その点につきまして先ほどお答えしましたが。

【司会】 そうですね。安井先生のほうからは先ほどお答えしたので、よろしいでしょうか。

【武井】 私も満州租借の問題というのはやはり日

中関係を考える上で重要な点であると思います。後に満州事変の時でしたか、そうした満州租借論が利用されたというような話がちょっと記憶にあるんですが、ただこの時孫文が満州租借について言った点については、やはり私も安井先生のおっしゃる通りではないかと考えていまして、私独自の見解をこの場でお出しするのはちょっと難しいので、こういった形でのお答えでお許し願えればと思います。申し訳ございません。

【司会】 他にいかがでしょうか。出ないようですので、司会がしゃしゃり出て恐縮なんですけれども、ちょっと安井先生にお聞きしたいと思います。あそこの展示に恵州起義の時の地図が出ておりますけれども、あれは何を基にしてお作りになったのかをお聞きしたいんです。それから横山先生には、最後のところで長崎の華僑は革命派に対して非常に距離を置いていると。それについては領事館の監視が非常に厳しいんじゃないかというお話をされてるんですけれども、たとえば先ほど神戸の例に比べても、ちょっと長崎は違うかなという感じがしますけれども、その辺は体制側の領事館の締めつけだけでしょうか。その点を横山先生にお聞きしたいと思います。その2点をちょっと、申し訳ありませんが。

【安井】 恵州起義の地図のことですが、今私はっきりした記憶がありません。展示の地図に書いてなかったですか。

【司会】 私先ほど拝見したんですが。

【安井】 では、後程調べてお知らせいたします。典拠は当然ありますから。今すぐには思い出せないので申し訳ございません。

【司会】 では横山先生。

【横山】 これも私が長崎の華僑の方とお話しした中で華僑の方が言われたことなので、それが私の意見かどうかというのはちょっと微妙なところなのですけれども、一つは中国あるいは清国時代の領事館の締めつけが厳しかったということと同時に、次の点が考えられます。神戸の華僑や横浜の華僑も、だいたい最初は長崎に上陸しているのですね。それでそのまま長崎に残られる方と、さらに神戸に行かれたり横浜に行かれたりする方に分かれます。それはどう違うのかということを長崎の華僑の方に聞くと、すごく志を強く持った人間は、長崎の都市の規模では不満があって、さらに神戸とか横浜というところに飛躍を求めて行かれる。比較的こぢんまりと安定を求める人が長崎に残ると。長崎の華僑の方が言っているのでよく分かりませんが、長崎華僑は保守的というか、今置かれている生活を守るということが優先されているのですね。将来の革命の成功を夢見て、夢に賭けてみようかなというような点が、ちょっと長崎の華僑には欠けているのだというようなお話をされる。言い換えれば保守的、あるいは経済利益を追求することが優先されて、政治的な冒険とかチャレンジというものには長崎華僑は弱いのですよと言われたので、ご紹介しておきます。

【司会】 どうもありがとうございます。他にいかがでしょうか、会場の方。

【横山】 先ほどの満州の問題ですけれども、私も孫文研究の中で少し言及しております。孫文というのは、外化の地として満州を認識していたと言うよりは、基本的に当面の敵、たとえば清朝時代は清朝、袁世凱が支配している時は袁世凱を打倒しなくちゃいけない、帝国主義を打倒しなくてはいけない、というその時代時代の革命戦略を遂行するためには、日本側の援助、あるいはソ連の援助が必要であると認識していました。その援助を求めるためには、一定の利権を放出しても構わな

いというクールな考えを持っていました。基本的に中国はまだ力が弱いから、中国単独の力で敵を倒すことはできない。しかし外国から支援を得て敵を倒し、その後に中国が立派な国になれば、支援を得るために取引をして失った利権はいずれ戻ってくる、取り戻すことができる、このように楽観視していたのです。中国が強くなるためには一時的な対応として利権を失わざるを得ないけれども、それは利権を放出しているのではなくて、戦略としていったん外国に渡すけれども、中国が強くなれば自然に取り返すことができるという、将来に対する強い自信を孫文は持っていたというのが私の理解の仕方です。

【安井】 華僑の話に関してですが、私は基本的には長崎と神戸はそんなに変わりはないんじゃないかと思っております。孫文が日本で作った革命の団体に、興中会というのと同盟会、それから日本で作った国民党、中国国民党、それから中華革命党の５種類があります。国民党と中国国民党は違いますので。一番早くできた興中会の支部、それから同盟会のメンバーではっきりしているのは横浜ぐらいじゃないでしょうか。神戸にも、辛亥革命前にはっきりと孫文達の運動を支援した華僑の人（日本人はさっき言った三上などがおりましたけれども）がいたんじゃないかと思って私は探しているんですけれども、はっきりとは確定できない。むしろどちらかと言えば梁啓超とか康有為といったいわゆる変法派とか、あるいは立憲派、清朝の体制を維持しながらその中で内部改革をしようという、そういう立場の人が日本華僑の中に多かったんじゃないかという気がしています。長崎だけがちょっと特殊というふうには私は思わないんですけれども。（人数の違いが影響していたのかもしれません。）

【質問者】 ちょっと話がそれるかも知れないんですが、孫文らの中華民国は、チベット自治区、ウイグル自治区のそういう領土問題に対する会合はどうやったんですか。

【司会】 これは横山先生お願いします。

【横山】 最近私、『中国の異民族支配』という本を集英社新書から出しましたので、その中に基本的な政策は書いております。もともと民族政策は時代によって違いますので一貫して同じ政策が展開されているわけではないのです。間もなく1911年の辛亥革命から100周年を迎えます。辛亥革命を達成しようとした革命派と言われるグループは、基本的に漢民族18省の独立を目指す主張していました。18省以外は、今の言葉では少数民族、当時の言葉では異民族の土地だ、ということです。辛亥革命というのは、清朝という異民族から18省に住む漢民族の独立国家を作ろうというのが基本的な考え方です。そうすると清朝時代や昔の皇帝の時代には、漢民族の18省以外の異民族のところも支配して、中華帝国を樹立していましたから、中華帝国は崩壊するわけですね。中華帝国の版図を維持したいという連中も多いのは当然です。中華民国を作った政府は革命派だけで政権を担当していたわけではありませんから、革命派と伝統派は国家構想が異なります。清朝を打倒すると、「五族共和」という形で、そのような周辺の異民族も中華民国の版図に入れようとしました。革命派の排他的漢民族主義が実現しませんでした。

外モンゴルは独立を宣言して独立に成功します。チベットもダライラマが辛亥革命の直後に独立を宣言いたします。けれどもこれは成功しない。外モンゴルを除いて、辺疆の異民族の独立は達成されませんが、1949年の中華人民共和国ができるまでに、辺疆のチベットや新疆ウイグルというのは、中華民国の一部であるけれども実質的にはイギリスが入っていたりして、実際の統治は中国政府の影響力から離れていたということは言えると思います。だから実態としてのある程度の独立性と、国家としての統一性の間にずれがあったのです。そのずれに関しましては、共産党政権が

人民解放軍を辺境地に派遣して、中華帝国の版図を統一をすることに成功します。それが今の少数民族を含めた中華人民共和国という形になっています。

【司会】 そろそろ予定した時間がきましたので、このあたりで質疑応答を終わらせていただきます。4名の先生、どうもありがとうございました。最後に藤田センター長から閉会の辞をお願いします。

【藤田】 本日は最後まで長時間にわたってご清聴いただきまして大変ありがとうございました。私は書院の解説的なお話をしましたが、今日の本題は孫文でして、孫文をめぐってそれぞれの第一線でご活躍の先生方にお話を伺うことができました。とりわけご当地の一番孫文に関係の深い神戸の地で孫文の講演会と展示会ができましたことを、我々としては非常に嬉しく思っております。本日は孫文記念館の安井先生と、北九州市立大学の横山先生に特別のゲストとしてお願いし、快く引き受けていただきまして、大変感謝申し上げます。ありがとうございました。また、最後に本学の武井さんのほうからいろいろお話しいただきまして、記念センターのいろいろな状況もご理解いただけたと思います。もし東京あたりへ行く機会がございましたら豊橋へお寄りいただいて記念センターのほうへもご訪問いただけたら大変ありがたいと思っております。記念センター長といたしましても、先ほど申しましたように東亜同文書院の存在を再確認しながら再評価できたらと思っております。私はヨーロッパの代表団みたいな形でヨーロッパの著名なそれぞれの大学に研究交流の交渉をするために出かけたことがありました。どこの大学でも「東亜同文書院」と言うと一発ですぐ分かる。「愛知大学は知らない」ということでありまして、ただ『中日大辞典』がありますとお話しすると「ああ、あの大学か」ということで分かっていただける。そういう点で東亜同文書院という名前はグローバルです。これはアメリカに行った本学のグループも同じ見解でありました。そういう意味では海外で書院は高く評価され、日本の中では先ほど申しましたような戦後の冷戦時代の事情がありまして少し評価が遅れているところがございます。我々としてはあらためて今後も東亜同文書院の存在およびその内容を研究し、広く知ってもらいたく思っています。卒業生でいろんな活躍をしてもまだ研究対象になっておりません。そういう意味でもまだまだ我々は研究に取り組みますが、皆様の中でも書院に関心をお持ちの方々、併せて我々と一緒に共同の研究を進めていただければありがたいと思います。

今日は6時まで展示会があります。それから明日もう1日展示会を予定しておりますので、まだご覧になっていないという方はぜひご覧いただければ大変ありがたいと思っております。なお先ほども案内されましたように、一番後ろに我々の出版物の販売も行なっていますので併せてご覧ください。どうも本当に今日は長時間にわたりましてありがとうございました。